11, 15~16

1977年刊「中国語研究」誌第16号掲載抜刷

現代中国語における主体的表現のことば(一)

〈その1〉判断詞“是”

(1)“是”の基本的意味特徴について

内　田　慶　市

現代中国語における主体的表現のことば(一)

〈その1〉判断詞“是”

(1)“是”の基本的意味特徴について

内　田　慶　市

＜目　次＞

0；はじめのはじめに

1；はじめに

2；“是”の基本的意味特徴は何か。（名詞述語文を中心として）

3；動詞・形容詞述語文における“是”はいかなる意味を表わすのか。

4；“是”はコト化を欲している。（“是～的”を中心として）

5；さいごに

0；はじめのはじめに

言語は，他の表現（たとえば，絵画・映画など）と同じく，人間の表現の一つであり，そこには，主体の側に属する表現（主体的表現）と，表現する対象である客体の側に属する表現（客体的表現）の二つが当然存在する。

このように，言語を表現としてみる立場にたてば，「文」とは，決して，形式主義的文法論（この中には変形文法も含む[注1]）でいうように，「主語」と「述語」によって成立するというようなものではなく，それらは，いずれも客体的表現に属するものであり，「文」とは，それらの上に更に，主体的表現が加わってはじめて成立するものである。（もちろん，それは，「語彙」として顕在化しない場合もありうる。）

もちろん，ものごとには，常に中間的な性格をもつもの，つまり，「又工的」なものが存在するのであり，従って，主体的表現と客体的表現というものは，はっきりと境界線を引けるものではなく，吉本隆明氏のいうように[注2]むしろ，傾向性として，連続したものとして把握すべきものであろう。

さて，現代中国語において，主体的表現に属すると考えられるものには，判断詞，能願動詞，一部の副詞，語気助詞等があげられるが，一体それらはいかなる意味，機能をもち，又，それらの間には，いかなる関係（特に主体的表現のレベルの差異）があるのであろうか。

このような問題を明らかにするための基礎的作業として，本稿では，先づ判断詞“是”をとりあげ，その基本的な意味特徴を明らかにしたいと思うが，あくまでも，現代中国語における主体的表現全体をとらえるための第一歩であることをはっきりさせるために，長い題目をつけて，本稿の全体の中での位置を示し，更に又，自分の言語研究の立場をもあわせて述べるべく「はじめのはじめ」を記した所以である。

1；はじめに

現代中国語において，判断詞[注3]“是”は，初級テキスト類でも第一課から現われてくる極めて基本的なことばの一つであるが，余りに基本的であるためにか，未だ明らかにされていない問題が数多く残されているように思われる。

“是”の大きな特徴としては，それが，名詞述語文において用いられる場

合以外に，動詞・形容詞述語文においても用いられる場合があることがあげられる。そして，後者の場合には，これまで「強調」として説明がなされてきたのである。しかし，「強調」というのは実に便利なことばではあるが，実際には，説明されていないのと同じことである。では，一体，それは，どのように説明されたらいいのであろうか。又，この二つの“是”の現われ方には，どのような関連があるのであろうか。

そのようなことを，言語を，あくまで表現としてみる立場にたって明らかにしようというのが，本稿の目的である。

2；“是”の基本的意味特徴は何か<名詞述語文を中心として>

現代中国語において，名詞は，ある場合を除いて，単独では述語になれず，次のような“是”を不可欠とする。

① 我是工人。（私は労働者です）

② 他是聡明人。（彼はかしこい人です）

ところで，その表わす意味は，「判断詞」とよばれるように，「話し手の判断」を表わすことは明らかであるが，では，一体いかなる「判断」を表わすのであろうか。

これを考える際に，先づ，古典語における“是”の意味をみていきたいと思う。

王力は，“是”を「繫辞」とみる立場から，“是”の「繫辞」用法は，指示代名詞の発展としてみる。(注4) つまり，“是”の複指（重ねて指す）の用法が現在の“是”の用法に発展したとみるのである。

③ 富与貴，是人之所欲也。（富貴というのは，人の欲するものである。）

④ 千里而見王，是予所欲也。（遠くから王に見参することは，私の望みである。）

というように，“是”で前に述べたことがらを，もう一度まとめあげて，その後に説明を加えるわけであり，このような“是”の用法が徐々に，指示性を失って「繫辞化」していくというのである。

王力のこの説明で注目すべきことは，「繫辞」の萌芽である“是”の複指用法において「前のことがらをまとめあげて，説明を加える」働きがあると

としている点である。このことは，現代中国語における“是”の一つの意味特徴を示しているように思われる。

王力のこのような考え方に対して，洪心衡は，“是”には，もともと「是認（肯定判断）」の働きがあり，これが，“是”の「繫辞」用法に発展していったとみる。〈注5〉今，ここで“是”の発展過程についての議論はさしおいて，洪心衡のこの見解も，実は，現代語における“是”のもう一つの意味特徴を示しているように思われる。

王力のいう，古典語の“是”における「上文をまとめあげて，説明を加える」という働きが，現代語においても継承されていることがよくわかるのは，次のような例である。

⑤ 看见前面有一棵桃树，是一棵很老的桃树。（前方に一本の桃の樹がみえた。それは，たいへん年数のたった桃の樹であった。）

⑥ 他发现在河边一段木头上坐着一个人，就大步走上去，举起灯一照，正是茫新春。（彼は，河べりの木の上で一人の人がすわっているのをみつけ，そこで大またで歩いていって，灯をあげて照らしてみると，それは，茫新春であった。）

洪心衡のいう「是認」の働きというのは，例を示すに及ばないと思われる。

すなわち，現代語における“是”は，上の二つの意味特徴を継承しており従って，「話し手の説明的肯定判断」ということにまとめあげることができるように思われる。

“是”を，「説明的肯定判断」のことばとみることによって，先の①②の例はもちろんのこと，次のような，特殊な“是”の用法である，いわゆる，「存在」を表わすという“是”（例の⑦）や，「圧縮された判断文」〈注6〉（例の⑧）というものも，十分に説明されうるのである。

⑦ 身边是两个负了重伤的病员。（そばには，二人の重傷を負った病人がいるだけだ。）

⑧ 现在是人民公社。（今は人民公社の時代だ。）

⑦は「存在」を表わすというものであるが，“有”を用いる場合との違いについては，張静が次のように説明している。

「“有”字只是一般地表示存在，并且往往是指刚发现的事物；“是”字

不仅包括了“有”字的意思，而且还有“早已存在”的意思」(注7)

つまり“是”を用いる場合には，存在していることが自明のこととなっているのであり，「有るか無いか」は問題ではなく，それが，「何であるかを説説明する」ことに重点があるのである。

ところで，⑦⑧の“是”には，「説明的肯定判断」という基本的な意味の他に，実は，もう一つ大切な意味が含まれている。そして，このことが，動詞・形容詞述語文に用いられる“是”との接点に他ならないのである。

先に，⑦⑧のような例は，“是”の特殊な用法であると述べたが，それはつまり，ある話しの場があって成立するものであって，すなわち言外の意味を有しているということなのである。

たとえば，⑧の場合には，「今は人民公社の時代である」という意味の他に，「過去はそうではなく，人民は苦しんだ」とかいった，「今」と「過去」を「対比」する意味が含まれているのであり，又，そのような場がなければこのような文は，成立しないのである。

次の例も同じである。

⑨ 咱们是农业社，这点困难吓不住咱们。（わしらには，農業合作社がある。このような困難では，わしらはビクともしないんだ。）

⑩ 这一年，人家是丰年，我是歉年。（この一年，他のところは豊作なのに，わしのところは凶作だ）

⑪ 院外是冬天，屋里是秋天。（外は冬だが，内は秋だ）

⑩では“人家”と“我”を，⑪では“院外”と“屋里”を対比しているし⑨でも言外に“咱們”と「階級敵」とを対比している。

ここで我々は，「名詞述語文においては“是”を不可欠とする」という規定からはずれる，「曜日，出身地，天候を表わす場合」における“是”の有無による意味の違いを想い出す。

たとえば，香坂順一氏は次のように述べている。

「<是>はつぎのような場合必要としない。

⑫ 今天　星期日。（今日は日曜日です）

⑬ 老李　上海人。（李さんは上海の人です）

もし，判断詞<是>をもった合成述語として，

⑫　今天是星期日。

⑬′ 老李是上海人。

のようにするならば，はなし手は

⑫″ 明天是星期一。昨天是星期六。

⑬″ 老王是北京人。老张是广东人。

のように，つづいて対比的な発言を期待するとか，あるいは，はなしの場に対比がひそんでいるときである〈注8〉」

つまり，⑫⑬のように“是”を省略しても文が成立する場合に，“是”を用いたならば，「対比」の意味が含まれてくるのであり，又，⑦⑧⑨⑩⑪のように，論理上からは成立しないような文でも，「対比」という話しの場においては，成立するのである。そして，“是”のもつ「対比」という意味こそが，動詞・形容詞述語文における“是”の意味特徴として大きく現われてくるのである。

3；動詞・形容詞述語文における“是”はいかなる意味を表わすのか。

動詞・形容詞述語文においても，次のように“是”を用いることができる。

⑭　他是勇敢，我们比不上他。（彼はたしかに勇敢で，我々は彼にかなわない）

⑮　这次是失败了。（こんどは失敗した）

これらの“是”は，これまで「強調」ということで説明がなされてきた。では，何故，「強調」という働きがでてくるのであり，又どのような意味での強調なのであろうか。

このことの説明は，言語を表現としてみる立場に立てば，さほど問題ではない。

つまり，言語には，主体的表現と客体的表現の二つが存在するのであり，この対立上においては，名詞も，動詞・形容詞も，同じく客体的表現に属するのであり，一方“是”はこの対立からみれば，あくまでも主体的表現の側に属することばなのである。そして，名詞述語文においては，一部を除いて“是”という主体的表現のことばが必ず語彙として顕在化しなければ文が成立しないのに対し，動詞・形容詞述語文においては，“是”は語彙として現

われなくても文が成立するのであり，いわば，「零記号」として存在しているのである。従って，話し手が，一つの話題に対して，はっきりと，自分の肯定判断を示したい時には“是”を顕在化させるのであり，そのことがつまり，「強調」というものに他ならないのである。

ところで，“是”を省略しても文が成立するのに，わざわざ“是”を用いるのには，自分の肯定判断をはっきりと示すという目的の他に（というよりは，その目的の背景には），もう一つの意味がある。それは，すなわち，先の章でのべた「対比」ということである。

たとえば，先の⑮では，「今度についていえば失敗した」という意味の他に「しかし，次は成功する」とかいった意味が含まれているのである。

次のような例も同様である。

⑯ 我是不干了！ （わしは，もうやらない）

この場合には，「他の者はどうかしらないが，わしに限っていえば，もうやらない」という意味が含まれているのである。

対比するのは，“是”の前のことがらばかりではない。“是”の後ろを対比する場合もある。（そして，この場合が多いのかもしれない。[注9]）

⑰ 不，我也没见过，是听我們厂里来这里看过病的老师傅说，…（いや，私もあったことはないが，私達の工場でここにきて診察してもらったことのあるベテランの師匠が，次のように言うのを聞いたことはある。）

この⑰の例では，“没見过”と“听説”が対比されている。

このように，動詞・形容詞述語文における“是”には「対比」という意味がが含まれているが，すでにみてきたように，このことは，動詞・形容詞述語文における“是”の独自な意味ではなく，一部の名詞述語文においてもみられる現象であり，「省略可能な“是”には対比の意味が含まれる」と結論づけておいていいように思われる。

もちろん，この場合にも“是”の基本的意味である「説明的肯定判断」ということが存在していることはいうまでもない。

2，3章で述べてきたことをまとめれば次のようになる。

<まとめa>

“是”の基本的意味は，「話し手の説明的肯定判断」である。

<まとめb>

“是”を省略しても文が成立する場合に“是”が用いられれば，「対比」の意味が含まれる。

<まとめbの補足>

「圧縮された判断文」における“是”，つまり「A是B」において，「A」と「B」が同一種類でない場合の“是”は省略することができないが，この時にも「対比」の意味が含まれており，そのような話しの場があってはじめて文が成立する。

4：“是”はコト化を欲している。（“是～的”を中心として）

3章では，動詞・形容詞述語文において用いられる“是”をとり扱ったが，“是”は句，或いは文の前にくることもできる。そしてこの場合には一般に“是”は省略されえないことが特徴である。たとえば次の例がそうである。

⑱ 土改工作队和农会开会，正是研究习二鬼子藏枪的事儿。（土地改革工作隊と農会が会を開いたのは，まさに，二のやつが銃をかくしたことを検討するためであった。）

⑲ 而更使他心疼的是，他将白白浪费一星期的时間。（しかも更に彼の心を痛めたのは，彼がこれからみすみす一週間という時間をむだにすごすことになるということであった）

⑳ 姚芝兰听到一阵沙沙声，…是下雪了。（姚芝 は，サラサラという音を聞いた…それは，つまり雪が降っていたのであった）

㉑ 我们不能忘记我们学校的任务是；向高等学校输送合格的新生。（私達は，私達の学校の任務というものが，高等学校へ規格にみあった学生を送りこむことであるということを忘れてはいけない）

上の例では，いずれも“是”は省略することができず，又，原因，理由，目的を表わすとされてきたものであるが，原因とか目的とかいうものは，あくまでも二次的な意味にすぎず，先に述べた“是”の基本的な意味，すなわち，「説明的肯定判断」ということで説明が可能である。

つまり，“是”以下は，名詞相語語としてみることができ，名詞述語文と何ら変わるところがないのである。言葉を変えていけば，“是”以下は，判断の対象として，完全に「コト化」[注10]されたものである。そして，「コト化」されるという点からいえば，句や文は，最も「コト化」されやすいものである。何故なら，句や文は，一つの叙述が完了したものであり，叙述が完了すれば，それは一つの事実（コトガラ）として，「コト化」にむかうからである。「コト化」されたものがきやすいというのは，“是”のみならず，他の主体的表現に近い動詞たとえば，次のような知覚，感覚動詞がそうであり，今後，主体的表現のことばをみていく上で興味深いことである。

㉒ 我知道他明天来。（私は彼が明日来ることを知っている）

㉓ 我觉得身体不舒服。（私は身体の具合がよくない）

さて，“是”の後ろに「コト化」されたものがきやすいということ，つまり「“是”はコト化を欲している」ということを，はっきりと示しているのは，“是～的”の形である。

“是～的”の形を明らかにするうえで大切なことは，“的”をどのようにみるかということである。

“的”は，現代語においては，次のように用いられる。

㉔ 这是我的词典。（これは私の辞典です）

㉕ 那是我的。（あれは私のです）

㉖ 我是坐飞机来的。（私は飛行機で来たのです）

㉗ 圆月升上来了，明亮明亮的。（満月が上り，あかあかとしている）

㉘ 我不知道的。（私は知らないのです）

今“是～的”の“的”を明らかにするうえで重要なのは，㉗㉘の例である。

㉗は，“いわゆる「状態化」する働きを持つ“的”であり，㉘は，語気助詞として，「確定（認）の語気」を表わすとされている。“的”である。

しかしながら，一見，違ったもののように思われる二つの“的”は，実は，共通した面をもっているのである。つまり，「状態化」ということは，変化を超越し，固定的にとらえるということであり，「確定（認）」ということも，本来，ものごとを固定的にとらえるということに他ならないのである。すなわち，「不変化」「固定化」こそが“的”のもつ本質的な意味機能なの

である。そして，このことが“是～的”を解決する鍵となってくるのである。

ところで，我々は，中国語の“的”と，日本語の「の」が，奇妙な対応をみせていることを知っている。特に，格助詞「の」ではなく，次のような，動詞，形容詞の後ろにくる「の」に興味をおぼえるのである。

㉙　その前にある赤いのがほしい。

㉚　私は知らないのです。

三浦つとむ氏は，このような「の」を「形式名詞」とみなし，「動詞・形容詞などの属性を，一度属性として表現した上で，同じ対象を，こんどは固定的に一つの実体であるかのようにとらえなおし，それを『の』で表現する」（注11）と説明している。更に又，同じ「形式名詞」「の」にも，具体的な実体をとらえて表現する場合（例の㉙）と，抽象的に，実体的にとらえて表現する場合（例の㉚）の二つがあることも明らかにしている。

なお，三浦氏は，次のような

㉛　私はすこしも知らないの

という，これまで終助詞といわれてきた「の」をも同じように「形式名詞」とみているが，これは，まさに，中国語における語気助詞“的”に対応するものであり，「状態化（固定化）」と「確定（認）」とのつながりが，日中両国語ともにみられるのである。

さて，“是～的”の説明に入ろう。

先づ，次の例をみていきたい。

㉜　这个时代是我的。（この時代は私のものだ）

㉝　这三门功课是基本的。（この三つの授業は基本的なものだ）

この場合には，“是～的”ともに省略できず，“的”によって，完全に「コト化」（三浦氏のいう実体化）されたものであり，“我的”“基本的”は名詞相当語としてみることができるのである。つまり，“的”によって「具体的な実体化」されているわけである。“是～的”の間に名詞（代名詞）が入る場合には，いずれもこの「具体的なとらえかえし」の表現である。

次に，“是～的”の間に，形容詞が入った場合をみていきたい。

㉞　桃花是红的。（桃の花は赤いんだ）

㉟　这一所房子是很大的。（この家はたいへん大きい）

形容詞は，ある属性を，静止したものとしてとらえたものであり，同じく，固定的な実体である名詞と共通する面をもっており，その意味で，「コト的性格」を帯びやすいのであり，“的”がつくことによって，一層それが顕著になるのである。又，この場合，一部の形容詞（数量形容詞など）を除いては，「名詞＋的」の場合と同じく，「具体的な実体化」とみることができると思われる。

なお，この場合，“是～的”が，省略することができるが，“是～的”がつくことによって，すでに，2・3章で述べたように，「対比」の意味が加わっている。たとえば，㉟には，

㉟′那一所房子是很小的。（あの家はたいへん小さい）

という意味が言外に含まれている。（注12）

一部の形容詞，たとえば，数量形容詞の場合はどうなるか。

㊱　女朋友是多的。（女性は友人は多いんだ）

この場合には，動詞が入る場合と同様に，「抽象的なコト化」としての“的”としてみておいてよいと思われる。又，このときにも対比の意味が含まれていることはいうまでもない。

次に，動詞が，状語なしで“是～的”の間に入る場合にはどうなるか。

㊲　那个人是杀牛的。（あの人は牛を殺すことを職業にしている人です）

㊳　这位穿大褂的是念书的。（この上着をきている人は学生です）

㊴　他在青年时代最初却是学医的。（彼は青年時代には医学を学んだのだった）

㊵　工，农，商，学，兵，政，党，这七个方面，党是领导一切的。（労，農，商，学，軍，政，党，この七つのうちで，党こそが一切を指指導するのである）

㊲㊳は，職業を表わす場合で，いわば例外的なものであり，“是～的”は省略することができない（省略すると意味が変わる）が，動詞が状語なしで“是～的”の間に入る形としては，㊴㊵のような形が一般的であり，“是～的”は省略可能である。

この場合の“的”は，「抽象的なコト化」を表わしているとみることがで

きる。たとえば㊵の例では，“党領导一切”（党が一切を指導する）と，先づ，“党”の属性を属性として表現した上で，更に，“的”によって，「～というもの」というふうに，「固定的に，実体であるかのように」とらえかえして表現しているのである。そして，それは“是”が「コト化を欲している」という，その欲求にもとづくものなのである。

例外的にみられる㊲㊳にしても，“是～的”によって職業を表わす意味に使われるのは，他ならぬ“的”によって，その動作が，一時的なものでなく固定的なものとなってくるからとみることができると思われる。

“是～的”が省略することができることから，この場合にも「対比」の意味が含まれていることはいうまでもない。

たとえば，㊴では，“以后学文学”ということが「対比」されており，㊵では，“工，农，商，学，兵，政”と“党”が「対比」されている。

動詞に状語がついて“是～的”の間に入った場合にはどうなるであろうか。

㊶　祖祖辈辈都是这么倒的。（先祖代々，このように（ゴミを）あけてきたんだ）

㊷　我們是坐火车来的。（我々は，汽車でやってきたのだ）

㊸　他們的矛盾，是因为水引起来的。（彼らのいざこざは水によってひきおこされたのだ）

この「状語＋動詞」が“是～的”の間に入りこんだ場合が，“是～的”の性格を最もよく表わしている。

この場合には，多くの場合，ある動作は完成したものである。完成したということであり，そこには“的”によって，はっきりと，動作の「状態化＝固定化＝実体化」が示されるのである。

こうしてみると，これまで“是～的”の“的”を，あるときには，名詞化の“的”，あるときには，語気助詞の“的”と分けてきたことが実は，無意味であって，両者は本質的に，同じこと，つまり，「コト化（実体化）」するものであり，ただ，その「コト化」に，具体的なものと，抽象的なものがあるということにすぎないことがわかるのである。

なお，この「状語＋動詞」が“是～的”の中に入る場合，“是～的”は省略することが可能であり，従って“是”には「説明的肯定判断」という基本

的な意味の他に，「対比」の意味がやはり含まれている。たとえば，ⓐでは原因を他のものと「対比」させているのである。そして，この「対比」ということが，つまりは，これまでいわれてきた

「如果要強调已发生的动作的方式，时间，地点等，就用“是…的”结构」[注13]

というものの本質なのである。

最後に“是～的”の間に，文が入る場合をみておきたい。

ⓗ 这主意是老刘出的啊！（この考えは，劉さんが出したんだろう！）

ⓔ 你是农民用生命保护下来的。（おまえは，農民が命をもって守ってきたんだ）

文は，最もコト化されやすいものは，すでにのべた通りであって，それを語彙の上でも顕在化したものがこの形である。

ただ，先に述べた「“是”＋文」の形とは，意味の上で若干の違いが存在する。つまり，「“是”＋文」の場合には，単なる「説明的肯定判断」でしかないが，この場合には，やはり「対比」の意味が存在するのである。 は「対比」の意味が含まれているとすれば、"是～的" は省略可能ということになるが、このときには“是～的”は省略することが無理なようである。従って，この形は省略可否による対比の有無ということでは説明されえず，原因は，他のところにあるといわなければならないのであるが，そのことについては，今後の問題として残しておきたいと思う。

以上のことをまとめれば次のようになる。

<まとめｃ>

“是”はコト化を欲しており，“的”によってそれが実現される。

<まとめｄ>

“的”によってコト化がなされる場合には，「具体的なコト化」と「抽象的なコト化」の二つがある。

<まとめｅ>

“的”によるコト化というのは，“的”が本来的に持っている「状態化＝固定化」という働きによる。

<まとめｆ>

“是～的”の場合にも，それが省略されるか否かによって，「対比」の意

味が含まれるか否かが決定される。（ただし「“是”＋文＋“的”」は例外）

≪まとめg≫

いずれの場合にも，“是”には「説明的肯定判断」という基本的な意味が備っている。

5；さいごに

“是”の基本的な意味特徴についての一応の叙述を終えたが，このあと，いわば本論ともいうべき，主体的な表現としての“是”にスポットをあて，副詞，能願動詞，知覚感覚動詞との，語順を中心として，主体的表現のレベルの問題を明らかにし，又，“是”がいかなる部分を「対比」させるのかを最後に述べて，本稿のまとめとしたい。

1976．12．14

＜注＞

(1) 変形文法も，形式主義的文法論の亜流にすぎないということについては，宮下真二「構造言語学の変形としての変形文法」（『試行』31号 試行社 1970）に詳しい。

(2) 吉本氏は次のように述べている。

「言語における辞・詞の区別といい，客体的表現といい，主体的表現というものが二分概念としてあるというよりも，傾向性やアクセントとしてあるとかんがえることができるし，また文法的な類別はけっして本質的なものではなく，便覧または習慣的な約定以上のものも意味しないことが理解される。品詞の区別もまったく同様で，品詞概念の区別自体が本質的には不明瞭な境界しかもたないものだとみるべきである」（吉本隆明『言語にとっては美とは何か』（勁草書房 1969）P.54～55）

(3) 「判断詞」というよび方の他に，「繋辞」とか，「同動詞」とかいうよび方があるが，筆者は，理由があって「判断詞」とよぶ。

(4) 王力≪中国文法中的系词≫（≪汉语史论文集≫所収）及び≪汉语史稿・中冊≫（第41节）参照のこと。

(5) 洪心衡≪≪孟子≫里的“是”字研究≫（≪中国语文≫ 1964.4）

(6) 张志公《汉语语法常识》（中国青年出版社 1955 ）P.109

(7) 张静《"是"字綜合研究》（河南人民出版社 1960 ）P.6

(8) 香坂順一『単文はどう分けるか』（『人文研究』11－11. 1960 ）
なお，例文の番号，訳，ならびに強調は筆者によるものである。

(9) ここに実は，"是"の未解決の問題である，どの部分を強調するのかということが登場してくるのであるが，このことについては今後の課題として残しておきたい。

(10) 「コト化」というのは，「名詞化」「名物化」ということとも若干異なり，むしろ認識論的な意味でのことばである。三浦つとむ氏のいう「実体化」は，筆者のいう「コト化」に等しい。

(11) 三浦つとむ『日本語はどういう言語か』（講談社 1976 ）P.118の要旨。
なお強調は筆者。

(12) 王了一《中国语法綱要》（竜門書店 1969 ）P.147を参照。

(13) 《基础汉语・下冊》（商務印書館 1971 ）P.78

(14) 本稿は，1976年7月17日に「中国語教育研究会」で，又，同年2月12日に「福井漢文学会第25回大会」で口頭発表したものをさらに敷衍したものである。